

明倫短期大学学会報告

明倫短期大学学会月例研究会抄録

当月例研究会も、明倫学会の下に開催されるのも4年目に入り、第18回（通算101回）となった。明倫学会の発展に伴い、月例研究会も新しい形が求められているように思われる。現在は年6回開催をすべて学内の先生方に御依頼しているが、学外の方や学内でも若い研究者まで、掘げてはどうかという意見も出ている。

平成18年度（2006年度）は、創立10周年でもあることから、常任理事会を中心に新しいアイデアを集め、更にコ・デンタルの学会として、充実したものとしてゆきたいと考えている。

（文責 福島祥紘 学科長 歯科衛生士学科）

第13回（通算第96回）：2005年4月27日（水）

技工用シリコーン印象材を用いた新しい研究用模型と個人トレーの製法について

野村章子（教授、歯科技工士学科）

伊藤圭一（助手、歯科技工士学科）

無菌顎の精密印象採得では、個人トレーと各種コンパウンドによる辺縁形成や、旧義歯および治療用義歯を個人トレーとする術式が一般的であるが、使用義歯の情報が十分に生かされていない。そこで、使用義歯から技工用シリコーン印象材を用いた複印象により研究用模型を製作し、その模型上で個人トレーを製作することで従来の術式における利点を生かしながら、治療時間を短縮し、適切な辺縁形態を簡便に再現可能な新しい術式をデモンストレーションした。歯科技工士および歯科衛生士の多くの参加者から一連の技工操作と臨床応用について活発な意見交換がなされた。

介護保険制度改革の概要と介護予防

本間和代（助教授、歯科衛生士学科）

平成12年、介護保険法が施行されてから5年が経過した。平成17年2月、平成16年までを1期とした見直し等の措置による介護保険制度改革法案が国会に提出された。日頃、保健・医療・福祉の分野を総合的に組み合わせた社会保障制度の下で働く私たちは、介護保険制度がどの方向に進もうとしているのか、また、介護保険法改正案の骨子となった「介護予防」で歯科の担う役割は何かを考えてみた。

第14回（通算第97回）：2005年5月26日（木）

「障害者歯科治療の実際 —新潟県障害者歯科センターと往診での 事例より病診連携を考える—」

木暮ミカ（講師、歯科技工士学科）

要介護者等への口腔保健医療サービスを提供していく上で、特に全身管理が必要な患者への対応や入院下での歯科治療の点で病院歯科と一般歯科診療所（かかりつけ医）との連携・機能分担は重要である。そこで本会では高次歯科医療機関との病診連携の実際として、新潟県障害者歯科センターにおいて歯科抑制治療の経験から重度の歯科恐怖症になった多数歯齦齦の自閉性障害患者に対して、新潟大学との連携で演者が行った心身障害者外来全身麻酔下歯科治療症例と、摂食嚥下障害に対するVF（嚥下造影）の事例を紹介し、病診連携の重要性を明らかにした。

骨髄幹細胞の分化誘導について —フッ化物利用の立場から見ると—

小黑 章（教授、歯科衛生士学科）

8週齢雄ddYマウス骨髄細胞の分化に及ぼすフッ素の効果をいくつかのマーカーに基づいて検索した結果、早期顆粒球方向への分化が誘導されることが知られた。それに基づき、飲料水からのフッ素摂取が骨髄細胞の分化に及ぼす影響を知る目的で、100ppm F⁻（=5.26mM NaF）を10日間与えた6週齢雄ddYマウス骨髄細胞の分化に及ぼすフッ素の効果を調べたところ、大きな変化を認めなかった。

第15回（通算第98回）：2005年6月23日（木）

咬合接触と咀嚼機能の関係

丸山 満（助手、歯科技工士学科）

円滑な咀嚼には、口腔諸器官の関与が重要である。通常、粉碎された食物粒子は、頬側から舌側へ移動し食塊形成が行われている。実験的にピーナッツを被検食品として、ヒトの口腔内で実験装置の上顎頬側咬頭内斜面の咬合接触を無くし咀嚼した場合、舌側の貯留量が低下し、頬側に粉碎された細かな粒子が貯留した。上顎頬側咬頭内斜面の咬合接触は、咀嚼運動時の食物移送と粉碎能力に大きく関与しており、補綴装置に適切な咬合接触を与えることが、咀嚼機能を回復するために重要であることが明らかとなった。